

# 仏教企画通信

## 41号

発行日:平成27年9月1日

発行所: 有限会社 仏教企画  
〒252-0113  
神奈川県相模原市  
緑区谷が原2-9-5-5  
Tel.042-703-8641  
Fax.042-783-0989  
発行人: 21世紀の仏教を考える会代表  
(有) 仏教企画代表  
藤木 隆宣

E-mail fujiki@water.ocn.ne.jp

## 戦後七〇年に憶う

### 大戦時代へのプロローグ

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

#### はじめに

今年(今年)は太平洋戦争後七〇年の「記念すべき年」である。私もそう思うし、一般の人びともそう憶っているのではなからうか。

新聞や雑誌、テレビなどメディアも、さまざまな視点や角度から「戦後七〇年」を取り上げている。それらを目にし耳にしていると、太平洋戦争なるものが日本人全体にとってきわめて重大な出来事であり、私個人にとってもかなり深刻なステイグマであることが自覚されるのである。

七〇年という年月は人の一生にとって決して短い時ではない。「二〇年ひと昔」というが、七〇年は「ひと昔」を七度も重ねたことであり、まさ



今年が太平洋戦争後七〇年として注目されるのは、日本人の寿命が延びたというだけではなく、よくぞ七〇年もの間「戦争」をせずに平和と繁

#### 一、独りっ子の世界

私が自分と他人との関係を意識しだした頃、周りにいた人たちは数多かった。寺院住職であった父は私が二歳のときに遷化し、母は三歳のときに逝去した。

私は父の寺から母方の祖父の寺に引き取られた。その寺は大伽藍を擁する地方の名刹であったから、檀務を手伝う若い僧が三人、女中さんと呼ばれていたお手伝いが二人いて、いつも賑やかであった。

小僧さんたちも女中さんたちも、私が両親を亡くした「独りっ子」であることを弁えていたので、私のことを特別の目で見、格別の扱いをしてくれた。

祖母は身体の弱かった私を心配でたまらなかつたようで、

栄のなかで過ごし得たものだという、ある種の驚きの感慨を人びとが抱くからではあるまいか。

かく言う私も平和な社会に生かされて、肺病に罹ることもなく傘寿を超えて五年にもなる。

とは言え、私も先はそう長くはないと思っている。昭和ひと桁生まれが物心ついた頃から今日に至るまで経験した事柄の一端を披露して、これから日本を背負う若い仏教者たちの参考に供したいと思う。

女中さんたちと一緒に遊んでいるときにも何だ彼だと文句をつけていた。

外出をするときは、友だちが半袖姿なのに私は長袖の服を着せられ、風邪をひかないようにと真綿を首に巻かれた。

うつつうしいことこの上ないが、我慢したのはひとえにおばあちゃんを喜ばせるためであった。玩具店には小僧さんと一緒によく行った。

玩具は私が選ぶのではなく、小僧さんの気に入った物を選ばれた。かなり高価な物でも私が欲しがったことにすれば、おばあちゃんが文句を言わな

いことを小僧さんたちはよく知っていた。  
私も子供心に小僧さんたちの狡賢さを知っていたが何も

言わなかつた。子供にも子姦さは十分あるのだが、子供ゆえに許されるのである。

昭和六年(一九三一)に満州事変が始まると、玩具も軍事色というか戦事色を帯びた物が売れるようになり、私も機関銃を買ってもらった。黒っぽいプラスチック製のような銃で、引き金を引くとダダダッと言音が出て銃口から火花が散った。

私は誰彼かまわず撃つたが、撃たれた小僧さんたちはその場に倒れて死んだふりをした。私は英雄気取りで引き金を引き続けた。

後になって思ったことだが、小僧さんたちがかなり本気で子供の私に付き合ってくれたのは、私が孤児で寂しい存在であることを十分に意識した上での慰安行動であったのである。

小学校に入っても私は先生たちから特別視された。一つ

#### 二、戦争時代へ

さきにも述べたように、昭和六年私が二歳のときに満州事変が勃発し、一二年(一九三三)に支那事変(日中戦争)が起こり、同一六年(一九四一)に太平洋戦争(第二次世界大戦)に突入した。

いま省みるとまさに戦争オンパレードの時代であった。今になって過ぎ去ったあの頃をふり返って見ると、どう

には一般の人が特別なところと感じている「寺」の子であったこと、他は私が両親も兄弟もない独りっ子であることを気の毒に思っていたことである。加えて周りの子と較べて私の成績が良かったからである。成績が良かったのは、私が頭が良かったからではなく、「家庭教師」が多かったからである。

小僧さんたちも姉や(女中)さんたちも私にとっては心優しい家庭教師であった。

五十音も九九も書き方(書道)も、かれら家庭教師が仕込んでくれた。私が五十音や九九を自慢気に唱えると小僧さんや姉やが大いに誉めてくれ、これを見ておばあちゃんが目を見てくれるので、彼らはますます家庭教師的になったと思う。

その間に時代は徐々に「きな臭さ」を強めていった。

も大人たちに特別な動きがあったとは思われなかつた。目につく動きがなかつたということは、彼らに戦争や平和について格別の思想や信条が見てとれなかつたということである。

小僧さんたちは平和を説く仏教のスペシャリストなのだから、殺人をも敢えてせざるを得ない戦争には絶対反対を

唱えるのが常道であろうのに、  
そういう態度は示さなかった  
ように思う。あるいは示そう  
としても示せなかったのかも  
しれない。

なぜか。今日流行の言葉を  
用いれば「空気」である。「空  
気」は「物体が存在しない、  
相当に広がりのある部分」を  
意味すると共に「その場の気  
分・雰囲気」を指す。

われわれはよく「その場の  
空気がそうだったのだから、  
仕方なかった」のように表現  
する。大勢がそうなのだから  
従わざるを得なかったという  
類の物言いである。

話を戻すと、満州事変↓支  
那事変↓太平洋戦争と続く「戦  
争シリーズ」は、異常な空気  
⇨大勢が然らしめたのだから、  
どうしようもなかったのだと  
いうことになるのか。  
もちろんごく少数の知識人  
たちは、警察に検挙されなが

### 三、「空気」と日本人

私は司馬遼太郎氏の小説や  
エッセイが好きでよく読む。  
その面白いところは小説の内  
容がいつのまにか深い学識に  
裏付けられた鋭い「日本人論」  
に化していることである。

ひとつ例を出そう。  
「日本人がずいぶん昔から  
身につけている思考癖は『真  
実はつねに二つ以上ある』と  
いうものであった。これは知  
識人であればあるほどはなは

らも信念を貫き通した事実  
であった。  
しかし大津波に呑み込まれ  
たように、大勢は戦争とい  
う大波に抗しきれなかった。

戦争を原理的に認めない仏  
教者も例外ではなかった。要  
約的に言えば、指導的な仏教  
者も小僧さんたちも戦争とい  
う巨大津波に抗し切れないど  
ころか、「致し方ないこと」と  
受け入れ、ついにはみずか  
らもこの大波に積極的に乗っ  
かってしまったということ  
はなかったろうか。

こうした昭和時代の戦争シ  
リーズは、周知のように広島・  
長崎の原爆悲劇を機に暗い幕  
を閉じた。あれから七〇年、  
日本社会は戦後復興の時代か  
ら戦争なしに見事な経済発展  
を遂げ、世界も驚く程の繁栄  
を実現し、平和な「古稀」を  
迎えるにいたったのである。

だしい。

たとえば「幕府という存在  
も正しくかつ価値があるが、  
朝廷という存在も正しくかつ  
価値がある」という考え方で  
ある。神も尊いが仏も尊い。  
孔子孟子も劣らず尊い。花は  
紅、柳はみどりであり、すべ  
てその姿はまぢまぢだがその  
存在なりに価値がある、とい  
うものであった。  
一神教を信じている西洋人



ならばこれをふしぎとするで  
あろう。かれらにすれば神は  
絶対の一つであり、自然、真  
理も一つでなければならな  
い。が日本人は未開のころか  
ら、山にも谷にも川にも無数  
の神をもっていた。

どの神もそれぞれ真実で  
あったが、そこへ仏教が渡来  
して尊崇すべき対象がいよいよ  
よふえた。さらに儒教がそれ  
にくわり、両手にあまるほ  
ど無数の真実をかかえこみ、  
べつにそれを不思議としな  
かった(『峠』、二〇〇三)。

司馬氏は日本人の思考癖と  
して、「真実はつねに二つ以上  
ある」と認識しようとする傾  
向を挙げているが、これを俗  
な表現で示すなら「あれもい  
いが、これもいい」、「これも  
捨てられないが、あれも手放  
せない」などとなるのか。  
宗教的には仏教伝来のいき  
さつが明らかにしているよう  
に、「仏」は当初蕃神(とな  
りぐにのみかみ)とか客神(ま  
るうどがみ)とか呼ばれてお

変質しただろうか。

この問題に迂闊に答えるこ  
とは危険であり、慎重の上  
にも慎重を期すべきである。  
その上でややはったりつぽ  
い私見を述べると、大勢はさ  
ほど変わっていないのではな  
かるか。

変わらぬ、あるいは変わ  
り得ない状況の根っ子に何が  
あるのだろうか。  
誤解を怖れずに言えばそれ  
は「空気」しかも「社会的空気」  
であると言えよう。

この七〇年は病貧争からの  
脱却と高度成長経済の達成が  
社会的または文化的な空気  
であったように思う。  
時の政権が何か政策を打ち  
出し、御用学者と言われる人  
たちがこれをメディアで繰り  
返すと、期せずして社会的空  
気が流れ出して人びとをいつ  
の間にか「その気」にさせて  
しまうのである。一旦その気  
になると日本人は一様に頑張  
り粉骨砕身して止まない。

戦時であれ平時であれ、国  
民的規模で走りだすとその情  
勢・状況を支配している「空  
気」その場の気分⇨雰囲気」  
が変わらない限り、走りは止  
まらない。一斉に動化し、一  
斉に静化する。

戦時中「欲しがりません、  
勝つまでは」を謳い文句にし  
ていた私たちが、敗戦を機に  
「平和国家日本」、「経済大日  
本」を唱えても、その変身ぶ  
りを攻撃する人はほとんどい  
なかった。空気が変わったか  
らである。

二〇一四年一月一四日に  
行われた衆議院選挙につい  
て、精神科医の斎藤環氏は興  
味深い話をしてている。

氏はさきの選挙で自民党が  
勝利したのは、日本社会が  
もつ「柔構造」のゆえである  
とする。それは表面的には変  
わっても深層は一切変わらな  
い柔軟さを意味し構造的に二  
重になつてきているのだとい  
う。

たとえば、外来語をカタカ  
ナ化して採り入れるが、日  
本語の構造はびくともしない  
し、4Kテレビが登場しても  
番組の中味は変わらない。二  
大政党制を導入しても選挙は  
どぶ板のまま。候補者がたす  
きで街頭演説、紅白だるま、  
万歳三唱といった様式を否定  
すれば、彼(彼女)は確実に  
落ちる。巧妙に新しい物を取  
り込むと同時に前近代を壊さ  
ないという二重構造、これが  
日本社会の特徴である(「何  
となく肯定 変わらぬ日  
本」、「朝日新聞」平成二七年  
一月一〇日)。

右に紹介した二重構造⇨柔  
構造は、現実の日本仏教の説  
明にも役立つのではなからう  
か。世界に冠たる教理仏教と、  
なかなか脱け出せない葬式仏  
教という二重構造である。

この二重性は日本仏教の特  
質であり、一方を保持して他  
方を切り捨てれば済むといっ  
たものではあるまい。  
とにかく、あと七〇年は、  
平和が続きますようにと、た  
だひたすら願ひ祈るのみであ  
る。

カフェ・デ・モンクの金田諦應師が語る

# 臨床宗教師養成は私の使命

聞き手・藤木隆宣

## 瓦礫の中にホッと作る空間を作る

金田師といえばカフェ・デ・モンクの活動ということになりませんが、傾聴移動喫茶という活動を思い立った経緯からお話いただけますでしょうか。

【金田】この震災では多くの命と財産、故郷の風景が失われました。この凍りついた空間に、ホッとできる場所を作り、あの凝り固まった時間軸、空間軸を解きほぐし、物語を動かしていく事が私たちの使命だろうと思いました。泣く、笑う、怒る、喜ぶというのは人間

的な営みです。ところが、火葬場での読経ボランティアとか、避難所に行ったとき、誰もかれも心を閉ざしてしまつて喜怒哀楽がないという印象でした。とにかく何かの方法で心を揺さぶり、泣いたり笑ったりしてもらふ事が必要だろうと思ひ活動が始まりました。

被災地へ入つての最初の活動はうどんの炊き出しから始まりましたが、それは誰にでも出来る、私たち僧侶にできることは何だろうと。それに加え、私たちなりの味付けで遊び心一杯の空間にしようと考えました。厳しい場所にこそユーモアは必要です。「Cafe de Monk」という名前も「モンクは英語で修道僧であり、また文句であり、悶苦である」という意味も込めました。カフェのBGMはジャズ・ピアノストのセロニアス・モンク。ついでにスピーカーからはボーズ。私たちのテーマ音楽はセロニアス・モンクの奏でる「ダイナ」という曲。ディック・ミネさんが歌いましたね。「ダイナ、我に囁け 愛の言葉を」と。私たちの

カフェではBGMを通してさりげなく愛の言葉を聞かせてくれ、というメッセージを出しているのです。気づいてくれた人は少ないかもしれませんが、私たち自身もその様な仕掛けを楽しんでいましたね。

ナ吉田「ムッシュ・天野」「エリック高橋」等々……ニッケネームを通して宗教色・宗派色を薄めていたのです。被災地を抱える苦悩に宗教の枠組みとか肩書きなんて全く意味がありませんから。———そういう意味で、ガンジーさんによく似ていますね。

死んだの生きたのという魂が動き出しにしている様な場所での活動は、私たち自身の心に遊び心がなくともじやないけどやっつけていけなかったと思います。これは禅語でいう、「喫茶去」に通じるのではないかと思ひます。「喫茶去」という私たちの先輩たちが培ってきた人との向き合い方、空間のつくり方の基本を踏襲しながら、私の感性に沿って現代的に、かつ被災地に合うようにアレンジする、そういうやり方をしていたような気がします。

それからカフェのメンバーにはニッケネームがあります。私は「ガンジー金田」と名乗りました。それから「DHO吉田」「ポッポリー」

## 八百万の神々が被災地を支援

———カフェに来た被災者たちが気軽に会話できるという、そういう雰囲気をつくるのは難しいことでしょうね。

聞いたたり、持っていた様々なアイテムは、その使い方もついでで雰囲気づくりや心を動かす・会話を動かす道具になります。

【金田】自分からふつとしゃべり出すような雰囲気はなかなかつくれませんね。だから夢が一杯詰まったケーキや美しい花々、沢山の飲み物をトラックに積んで持つていくと、お年寄りも乙女のような顔になります。「おばあちゃん、どれがいいの。今日はどういう気分？」なんて、ケーキを選んで分らないながらその日の気分や体調を

冬は炭火の中で焼きいもを焼いて食べて頂きました。ある時、親しくしているキリスト教の牧師に焼きいも係になつてもらつた事があります。これは後々気づいたことですが、宗教協働とはこういうことなのかなと思ひます。

焼き芋を焼いている場所から離れたら、彼はキリスト教の牧師です。背景には大きな教団のしがら

みがある。でも、ここにいる限り同じ方向を向いている私たちの仲間なんです。私がここにいる、横に神主がいて、こちらのほうにイスラムの聖職者がいる、そして焼きいもが出来るのを待っている。この焼きいもは孫を津波でさらわれて、まだ遺体が見つかからないと泣いて泣いているおばあちゃんに渡す焼きいもなんです。「さあ、ガンジーさん、焼けたからおばあちゃんに持つていって」といわれて私が持つていく。また戻つてきて、「ばあちゃん、笑つてたぞ」「ああ、よかつたね」と口々に喜び合ふ。この空間には教団も経典も教義もない。宗教が混じり合つて出来る宗教協働の空間で、この焼きいもは、私たち宗教者の提供する究極のケアじゃないかと思ひます。

## 祖師の言葉に気づく

———大震災では本当にいろんな体験をされた。

【金田】ギリギリのところを体験しました。震災の夜、被災地を包み込んだ美しい星空からは「気づき」というのでしょいか、真理の一端を垣間見た様な気がします。



瓦礫で作った看板



石巻市開成仮設団地

日本人は八百万へやおよろずの神々で、だからキリスト教とイスラム教が戦争をしているといつても、なんで戦争をするか分からない人たちです。そういう人たちが、牧師さんやイスラムの人や、神主さんたちを引き連れて坊さんが歩いている、あるいは牧師さんが主催するクリスマスパーティーにお坊さんがいる、そういう姿を見てホッと安心するんです。これが本場の宗教の姿だと思つて下さつた人たちが随分いらつしやいました。八百万の神々が俺たちのことをこんなに心配してくれると、それだけでホッとするんですね。

それから必ず花を持つていきました。お寺に咲いている花です。そこに亭主のメッセージをきちつと添えるということですね。例えば「初恋」が花言葉という花を持つて行つて、「ばあちゃん、こいつ、何ていう花言葉だか知つてる？これは初恋なんだよ。ばあちゃん、初恋はいつだったべ？」この様な感じで会話を動かしていく。何げなく持つていきながらも、これはあくまでも、会話を動かすためのアイテムだ、ということは常に意識しながらやつていました。

また、破壊された町や海、人々の苦悩を通して学んできた宗教的フレーム・宗教言語が崩れ落ちるのを感じました。自分が今まで培つた様なものが崩れ落ち、削り落とされ、そこから再び築き上げていく、そういう繰り返しの途中で、



金田諦應師(中央)とご両親

最後につかんだもの、これが後に臨床宗教師研修を立ち上げていく一番の原動力になったのかなと思っと思っています。なかなか言葉で伝える事が出来ない。でも、そういうスピリチュアルな(霊性といいますか)世界はどの宗教の教祖もおっしゃってますよね。言葉では伝えられないも、不立文字である、教外別伝である。そこが一番大切なのかなと思います。

そぎ落とされて、最後に残ったものを仏から仏へ、仏々祖々、唯仏与仏という形で伝えていくというのはいくことなのかと。それを現場の泥の中をはいずり回りながら、自問自答しながら体に染みこませていったような気がします。私のベースは曹洞宗です。道元禅師様の語ったあの言葉はこういうことなのだと思いがさされていく。そういう意味で、それぞれの属している宗派も大切にしながらはならない。それを捨てたら駄目です。しかし、より深めていくために、いったんそれを下ろし、そぎ落とさないという事です。どこでそぎ落とすか、それは苦しみとか悲しみとか、苦悩の現場の中に飛び込んで行くことだ、そういうことでしょうか。

苦悩の中を歩き続けると視野狭窄の状態に陥る危険があります。身も心も動かなくなってしまう状況、それを、ちよつと視野を広げて、もう少し高いところから自分を見る事を心掛けました。カフエの活動の中に、ああ、よくやるよ、お前を動かしているものは何なんだ？ 次に何をすればいいの？ と自分の姿をちよつと上から見て自問自答したり、時には経典の言葉に答えを求めたりの連続でした。『随聞記』の中に、栄西禅師の

話があります。建仁寺の僧正だったときに、親子三人、餓死しようだから慈悲を以てお救い下さい、と貧しい男が訴えてきた。寺には施すべき食料・財物がなかったの、仏像の光背を造るためにとっておいた銅(あかがね)を、之をもつて食物にかえよと男に渡してしまふ。そこで門弟たちが、仏像のための材料を俗人にやってよいのか、その罪如何と騒いだ。禅師の答えは、餓死しそうな衆生には仏像全体を渡しても仏の意に叶うのだと、またこの罪によつてたとえ地獄に堕ちたとしても衆生を餓

**行くと言ったら必ず行きます**

カフエを開いて、そこに被災者が来てくれることを待つことに意味があった。

【金田】 そうです。われわれがやったことというのは、役に立つことかもしれないし、役に立たないかもしれないし、焼け石に水だったかもしれない。気づかずに通り過ぎていく人もいました。それでもやっぱりおれたちは被災地の泥の中にホツとする空間を作つて待つ、そのこと自体に意味があるということは何度も噛みしめながら行いました。少しづつ人が人を呼んで、最近では多いところで百二十人、それぐらい来られます。そういう一つ一つの思いの積み重ねだったのかなと今思いますね。

今では仮設住宅の住民さん同士が、「和尚さんたちが来ているよ。一人でよくよく考えていてもしょうがないから、一緒に行こう」と誘いあつて来てくれます。「なんか、和尚さんたちのとこさ行くことさあ、ほつとするよ」と。そんな

死から救うべし、と。この慈悲という行為によつて親子が一生暮らせるのか、やはり貧乏で死んでしまうかもしれないではないか、要するに無駄になるかもしれない。でも、それはそうではないんです。慈悲という行為には見返りが無い、ただその慈悲を行うこと自体に意味があると思えます。カフエを開いても誰も来ない日がありました。そのとき誰も来なくてもいい、ただそこに私たちがいることに意味があるんだと、そう腹を括らせてくれたのが『随聞記』でした。

ことを言われるようになってきました。嬉しいですね。嵐の中、行ったこともあるんですよ。台風が近づいてくる、石巻直撃。でも、十日ほど前に「行きなす」と約束しているし、チラシも配つてある。当日の朝、自治会長さんから「金田さん、今日は来ないで下さい。こつちはものすごい。来たら死にますよ」と電話。電話の向こうからは物が吹き飛ばされる、ばたんばたんという音が聞こえる。

遺族の方にとって、お位牌は大事ですよ。【金田】 大事なんです。曹洞宗は大切にしますし、特に海沿いの人たちは「津波が来てな、流されそうになったら位牌を持って逃げろ」と言われ続けています。位牌を取り戻して亡くなった方が随分いるんですよ。カフエに何種類



傾聴移動喫茶初代「カフェモン号」



位牌は命の繋がり象徴

**位牌やお地蔵さんには神通力がある**

「私たちは行くと言ったら必ず行きます。どんなことがあつても行きます」と答えたものの、女房と二人で「どうする?」「諦應さん、どうするの。私、諦應さんに従うから」と言います。「よつしやあ、んじやあ行くべえ」

車ですよ、荷物もたくさんある。

【金田】 車高の高い軽トラックは、風で飛ばされるから荷物を全部下ろして乗用車に積み替えて三陸道を走りました。途中反対車線で横転している車もありましたが、なんと仮設の集会所にたどり着き、ガラッと戸を開けたら、たった一人おばあさんが私達を待っていました。女房と顔を合わせて、「おい、来てよかつたな」「ほんとに。ほつ

とした」と涙顔。おばあさんは何のために来ていたかという、前回のカフエのときに、息子さんのお位牌を作る事を約束した。その位牌を待っていたのです。そのおばあさん自身もちよつと心臓が悪くて、いつ死ぬか分からないような状態だったんですね。それが嵐の中、息子さんの位牌をもらおうと、私達を待っていたのです。息子さんは直葬で、一回もお経も何も上げてもらっていませんでした。だから俗名の位牌ですが、「おばあちゃん、ほら、息子さんだよ」と渡したらさすがに喜んでくれた。あのときは、やはり行くと言ったら必ず行くという、あの覚悟は間違いないなかつたと思えました。

かのお位牌を置いておくと、こつちが聞く前に位牌に向かつて物語を語りだしました。これは大きなケアだった。普通の傾聴ボランティアにはできないことでしょうか。ここに、宗教者がやっていることの意味があると思います。そこから物語が動いていくんです。命の繋がりを語り出すんです。

仮設の集会所には三十人、四十人と大勢の住人さんが集まっています。それぞれが背負いきれない重荷を背負っています。お互いに自分の事についてはなかなか語り出しません。そこに位牌がぽんと置かれている。「ばあちゃん、どうしたの。これ、欲しい?」「いやあ、流されちゃって、私の亭主のが」「亭主はどこで死んだの?」「どこどこでね」「遺体は見つかった?」「見つかってない」、そういう核心的な話がさつと動く。これ

はすごい力でした。全日仏から頂いたお数珠も置いておきました。必ず手から手へ渡します。渡しながら健康やお金、そして家族の事。将来への不安や希望など様々な話をしました。お経文は一切唱えませんでした。ピンピンコロリとか、何かぶつぶつ言つて手を握つて渡すだけです。それでも私達の手の温もりをありがたがるんですね。

それからお地蔵さんです、手のひら地蔵。これは喜ばれました。大切な人を亡くして寂しい思いをしておられる方に差し上げますとメッセージを置いておきます。絶対こつちから配つたりはしません。配つてしまふと布教になる。だから必ず置いておいて、その人が手を出したら差し上げる、そう自分たちでルールをつくつていました。これは臨床宗教師の研修でも、口を酸っぱくして言うんです、布教と間違えられる事は絶対に避けるようにと。

お地蔵さんはもとも原型みたいなものがあつたんですか。【金田】 最初は石屋さんが石を削つて造つたお地蔵様を送つてよこして「和尚さん、配つてもらえますか」という。どんなものかとカフエの入口に置いてみたら、たちまちなくなつた。みんなお地蔵様の前で泣くんです。わんわん泣いて、孫に似ている、ひ孫に似ている、じいちゃんに似ていると、同じ顔のお地蔵さんですけれどね。何だ、これはすごいな、お地蔵さんの前では皆素直になる、そして人を癒す。これはちよつとお地蔵さんに手伝ってもらわれないといけない、という事になつてきた。次第に仮設の住人が大切な人に想いを込めて作るようになってきたんで

す。粘土で作って知り合いの陶芸家さんに焼いて頂きます。

ご主人を亡くした人が、「和尚さん、うちの旦那、眼鏡をかけていたんだ」という。私が眼鏡を描き「これでいいのかな」と、ぼんと彼女の前に置いたら、それを見ただ途端、パッと取って見つめて、ワツと泣き叫ぶんです。被災後二年間、泣けなかった人です。「なん

### 生者と死者をつなぐのが宗教者

【金田】津波の中、身重で逃げた女性が双子を出産したけれども、一人は脳性マヒだった。それで病院にずっとかかりきりだったので、二人目の子は一度も抱っこできなまま死んでしまった。そういうお母さんが来られた、「じゃあ、その子のお地蔵さんを造ろう」と。後日出来上がったお地蔵様を集会所へ持って行きました。赤子を愛おしむ様に胸に抱きしめていました。お地蔵様を渡す時は近くにいた人達を呼び、お地蔵様を手の中に入れて、手を重ねます。「ほら、リナちゃんだよ」と言



みんなの手の温もりで亡き人が蘇る

であんた、私を置いて逝ってしまったの。旦那さんは避難する人達を誘導しながら、津波にさらわれちゃった。「人のことばかり考えて。私のことだつて考えて」と大きな声で叫ぶ。周りにいた人もしゅんとなってね。心の奥底にこびりついてた気持ちが一気に吹き出たという感じでしょうか。そういう場面は何回も見ました。

「た」と言つて涙を流すんです。息子を失つたお母さんも、息子の身替わりだつてワツと泣き出す。そういうことなんですか。

生きている人と死んだ人を繋げていくという作業、これは私たちが常日頃お葬式の中でやってきたからこそできるので、その経験のない人にはこういう発想が出るはずがないと思います。

——そういう場でもお経を読まないというの、宗派の違いとか、そういう配慮ですか。

【金田】そうですね。仮設の住人さんの宗教は様々です。ですから集会所という公共空間では絶対にお経は唱えません。しかし、要望があつてそれぞれの仮設の部屋に行つたら唱えます。どんなことがあつても集会所では読まない。それは私たちのルール（倫理）です。

だから、経文の代わりに真剣な顔で「テクマクマヤコン」と言つてみたりすると、みんなワツと笑います。「おばあちゃん、笑えるべ。おじいちゃんが笑わせてくれたんだからな」と。そこら辺は現場の空気を読みながらの即興ですね。

今は「欲たかり地蔵」（欲張り地蔵）を作っています。皆仮設を出るにはお金が必要ですから

ね。お金はいくらあつてもいいのです。そういう自分の置かれていた状況をちょっと別の角度から面白く表現するお地蔵さんです。ドイツの精神医学者フランクフルの云う「自己距離化」とう考えですね。傾聴の基本中の基本は「答えは出さない」という事です。物語が動き始めるまでじつと待つ。ひたすら待つ。

震災後三年目の春でした。宗教系の支援は三年が一つの区切りと言われているし、スタッフも疲れしてきたから、そろそろ活動も終りにしようかなと思つてた。そうしたら「和尚さんたちのうわさを聞きました」と、手紙が飛び込んできた。

「私の息子は津波で流されて死にました。あのとき、私は息子を抱っこして逃げました。みんなに助けられました。助け上げられなかったときに、手を見たら息子は流れてたんです。私はその日から一年間

### 問われる臨床宗教師の傾聴能力

【金田】出かける日の朝に確認の電話をしました。ところが、出ないんです。でも行くと言つたら必ず行くというのが私たちの信念です。門を出ようとしたら電話がかかってきた。彼女のご主人から

です。「和尚さん、今日、来られることは知っていました。でも、うちのやつ、今朝、大量の睡眠薬を飲んで自殺未遂を図りました」。ピーポーピーポーと救急車のサイレンが聞こえる。「だから和尚さん、今日は来てもらつても、うちのやつはいないし無駄足になります」と。「でもね、ご主人、私たちが行くと言つたら必ず行くんで

ずっと寝たきりでした。二年目は何とか元氣を取り戻さないといけないということ、無理に明るく振る舞いました。とうとう私は鬱病になってしまいました。……自殺未遂もしました。息子は私のことをうらんでいないでしょうか。なぜ私だけが生き残つたんでしょうか。和尚さん、息子は今どこにいるんでしょうか。和尚さん、助けてください。私、待っています」

電話番号が書いてあつたので、すぐ電話して、「今手紙を読んできた。あなたの苦しみは伝わってきた。辛かったね。すぐつていう訳にはいかないけれども、二日か三日、時間を頂戴」ということでスタッフに連絡しました。

「行けるやつは誰かいるか？」一人の若いお坊さんが手を挙げた。永平寺から帰ってきたばかりの若い僧侶です。「少し厳しい場所に行くんだけれども、行くか？」と言つたら、「行きます！」と。二人で行きましたよ。

す。仮に奥さんが快復して、和尚さんたちは来なかった、というようなことになつたら次につながる「ないんです」、そこが気合いです。覚悟だと思つてます。

それで行つてみたら、もちろん彼女はいませんでした。住人さんが集まつていて、みんな抗うつ剤の薬を飲んでる様子です。保健師さんがたまたまやってきて、「和尚さん、ここはこういう状態なんです」という。若い僧侶はこの状況に表情が強ばつて声が出ません。

きました。「和尚さんは、あなたの帰りを待つていたよ。自ら命を絶つようなことは、少なくとも和尚さんの前ではしないでほしいな」つてちょっと怒りました。マニユアル的には本当は怒つては駄目ですが、「ごめんさい」と言つたとき、その後の会話が続かない鬱病ということもあつたでしょう。私も前に座つて彼女の口から言葉が出てくるのをじつと待つていたんです。すごい時間でした。

そうしたら、ぽつんと言います。「和尚さん、私の子供は今どこにいる？」本当に絞り出すような声です。ここで答えを出しては駄目です。十分くらいだつたでしょう。か、密度の濃い沈黙の後で、「お母さんだつたら、どこにいてほしいと思うの？」と聞いたんです。

再び沈黙の時間。「和尚さん、光がいっぱいあふれて、お花がいっぱい咲いているところをじつと欲しい」と。二人で行きましたよ。

### オールお寺で取り組んだカフェ活動

——そういう活動については、奥様やご家族の協力も大きいですがね。

【金田】そうですね。スタッフは十人ほどが現地に行きますけれども、後ろを支えてくれる人たちがそれぞれの役割があります。妻もそうですし、父も母もそうです。それからお檀家さんには助けられました。カフェの日程というのは大体二週間くらい前に決めます。そうしないと告知もできないし、ローテーションも決まらなくなつてしまふ。ですから、その日にお葬式が当たつてしまう場合がある。そういうときはきちんとお話しして、「実はさ、この日はもう約束してい

い」、熟した柿の実がぽんと落ちてくるような答えが返つてきました。「そうか、和尚さんもやっぱり同じことを考えていた。そういうところに行けるといいなあ。二人でお祈りするか」と。

次に行つたとき、彼女は絵を描いてきました。「和尚さん、こういう所について欲しい」。長い長い時間の中で、問いと答えがぐるぐる回つて最後に出てきたのが、光花という答えでした。それが導き出されるまで、私たちはじつと待つていなければならぬ。そこがとても肝要なところで、臨床宗教師としての凛とした佇まいと傾聴能力が問われる瞬間です。普通でしたら、成仏しているとか、極楽浄土にいるとか、つい宗教的な救いを言つてしまいがちですが、それでは彼女の文脈の中の救いにならないのです。そこをぐつと我慢して、「待つ」ということですね。

て、必ず行かないと駄目なんだ。一日ずらしてくれませんか」と頼むと、檀家さんは「和尚さん、構わないから行つて」と。「おれたちが被災地に行けない分、和尚さんが行っているんだから、あつちを優先して、そんな感じでした。

「何だべ、和尚さん、おれたちのことをほつぽりなげて」というふうなことは一回も言われませんでした。新聞やテレビでしよつちゅう取り上げてくれましたから、「和尚さんはああいうことをやってるんだ。いやあ、なかなかできんぞ。一日ぐらゐらずしてもいいから、あつちのほうの人の支えになつてくれ」。だから、お寺、檀家、地

域の人に支えられて、その一番先頭に私達がちよつといて、軽快な音楽に乗って、ジョークを言いながら巡回していた。それだけの話なんです。

——いやいや、それは大変なことですよ。自他不二といえますか。

【金田】 そうなんです。だんだん核心に触れた言葉を聞き分けていくと、自分も他人もないような世界に入る感覚になってくる。それがきつと「慈悲」という事なんですよ。相手が語る物語の中から心を受け止めて、相手の物語の文脈に沿って次の言葉を返していく、そういう作業の繰り返しでした。他者に向かう心は同じ強さで己に返ってきます。その繰り返しの中で知らず知らず自分自身の信仰を再構築していく、そういうことだったと思っています。

苦悩の現場は常に動いております。マニュアル通りという訳にはいかない。災害マニュアルだとか、傾聴マニュアルだとか、いろいろありますが、それはそれで先輩たちが積み重ねてきた、時々集大成です。それは大切にしないとダメです。でも、実際に現場に入ったら、それだけにとられていたら駄目です。とにかく現場から感じ取って、現場から創造していかないと、本当の真心のこもったケアというのはできません。

### 今後必要になる臨床宗教師的発想

——お話の中に何度も臨床宗教師という言葉が出てきました。金田師は東北大学の実践宗教学寄附講座を立ち上げたメンバーでもあるし、その中で臨床宗教師研修を指導されておられます。そこで例えば、曹洞宗ですと現職研修とか

い。現場でイメージネーション膨らませ、そして創造（クリエイション）していく、臨床宗教師の研修ではどういふような言い方をしています。ここが分からないと、技術だけ学び取ったって何の役にも立たないんです。

あるいは現成公案の意味とはこういうことなのか。諸行は無常である、現場は常に動いている。現場からいろいろな問い掛けがある。宗教者にとって、現場は問いです。そして現場とは苦悩が満ちあふれている場所である。現場がどのような状況になって、どのように動いて、どのような空気になって、次にどの答えを待っているかを臨床宗教師は感性を磨き、全身を受信機にして、感じ取りそして行動していかなくてはならない。禅問答と同じ。そういう深みに通じると思います。

それからとても大切だと思つたことは、自己の身心を保つことと、自己の身心が穏やかなことと、曇りのない鏡の状態でないことと、傾聴活動は出来ません。身心を保つためには戒律が必要だと言うことに気が付きました。しかし、それは授けられた戒律という事ではなく、切に他を想う時、身心の奥底から熱く沸き上がってくる戒律です。慈悲心が戒律を沸き上がらせているんですね。

ありますね、ああいうところにその研修プログラムを入れることは出来ませんか。

【金田】 宮城県宗務所で教化主事をしておりましたから現職研修では随分工夫しました。現職研修は時間的に制約されておりますし、



臨床宗教師研修一石巻市大橋仮設集会所一

実習の現場がありません。講義中心では全く意味がないのです。

現職研修の受講者は、住職あるいは副住職として臨床（現場）におります。ですからある程度基礎的な訓練は出来ていると思えます。その経験は全く無駄ではないと思います。お寺とお檀家という関係を持っていて、また地域社会という現場を持つている。その中で七転八倒しながらやっている。それは極めて高いスキルだと思えます。お檀家様と何十年も向き合った人と、大学生が臨床宗教師のありようを学ぶのでは全然違います。

相違点は「ホームとアウェー」の関係で表現できます。曹洞宗のお寺だったらみんな曹洞宗のお檀家さんで、大体のことは同じ方向を向いていて師匠と弟子との間での受け渡しがあつて、また周りの人たちに教えられながら向き合っ

ていきます。スポーツで表現したら「ホーム」なんです。しかし、臨床宗教師の現場は「公共空間」でそこには様々な価値観の方々がいます。所謂「アウェー」です。例えば被災地や緩和ケアなどをを行う病院に行くと様々な宗派の人がいます。キリスト教の人もいるし、神道の人もいます。宗教そのものに無自覚な人もいます。そのときに「ホーム」と同じように自分の宗派の教義、ドグマに基づいた聞き方とか、言い方をしてしまったらアウトです。

アウェーに入るには訓練が必要です。臨床宗教師研修では、相手が語る苦悩を自分の価値観でねじ曲げないように、自分の信念（ビリーフ）、宗教観などの価値観を相対化する作業を徹底的に行います。そのためには、自分の生育歴を書き、更にその生育歴に対する自己評価を行います。現場を想定したロールプレーを行い、その中で問題になったところを、お互いに検討し合うという場を通して、自己の価値観というものが削られていって、残ったものに気づいていく。そういうところまで追い詰めるよりも、純化して行くと言ったほうがいいでしょう。そこが非常に大切なところですね。

それから、アウェーでは他業種との協働作業が前提です。僧侶もチームの一員です。チームワークの方法を学ばなければなりません。特に宗教者が注意しなくてはならないのは「布教とケア」の区別です。ですから、臨床宗教師の守るべき倫理綱要なども学習します。実際のケア現場はあらゆる信仰・価値観の宗教者との協働作業

になる場合があります。ですから、他宗教・他宗派への理解が必要になってきます。私たちの臨床宗教師研修は一定の条件が満たされればあらゆる宗教・宗派の方々を受け入れていきます。宗教に公平な立場を取る国立大学に設置されているという事は極めて大きな意味があると思います。

今まで様々な宗教者を受け入れてきましたが、曹洞宗は現職研修をしっかりと行っていると思えます。特に人権学習は曹洞宗ほど徹底して研究し、学習している宗派はありません。実際、臨床宗教師研修では曹洞宗の人権資料(CDD)を利用し、曹洞宗関係の講師が行っており、人権とはその人がその人らしい生き方を全うする、それをみんなで擁護する事だと思えます。ですから、人権学習も視点を換えれば十分に臨床宗教師的訓練になるのです。

また曹洞宗では身心を通した修行体系があります。それは現代の宗教・宗派ではとても貴重であると思えます。宗教者らしい凛とした佇まいがあります。それをベースに据えて、訓練を展開すれば質

### 東京にカフェ・デ・モンクを

【金田】 私たちの活動には、東京辺りから若い坊さんが尋ねて来ましたが、私もこの様な活動をしたかった、東京にいますとお葬式と法事だけでやってやれない、等と言いつつ出るものだから「あなたは何を言っている。葬式も法事もろくにできない僧侶が被災地に何を求めている。ここはあなた達だ。東京へ帰って、お檀家様にちゃんと向き合いなさい。心のこもつ

たお葬式や法事を工夫しなさい」と、お帰り頂いた事が何回かありました。彼らは被災地に自分探しに来ているんですね。

の高い臨床宗教師を育てることが出来ると思えます。宗門では「上山の修行体系」は完成されていると思えますが、それに対する「下山の修行体系」ですね。そこが宗門に不足している部分です。曹洞宗の僧侶はむしろ臨床宗教師の資質が充分にあると思えます。これは今までのこの研修に関わってきた確信したことです。それには現職研修とは違う研修制度を設ける必要があると思えます。

そこで臨床宗教師的な訓練が必要になってくると思えます。相手の信仰・価値観や苦悩の状態を感じ取りながら向き合っていく。それには宗教者としてのあらゆる立場の人を理解するレンジの広さと感性の豊かさが必要で、また、この様な社会からは様々な苦悩が生み出されてきます。臨床というのは常に現場に真摯に向き合うことです。そこをきちんと押さえていければこれからの僧侶・寺院が活動できる領域、社会貢献は充分にあると思えますし、むしろ社会はそれを期待しているのだと思えます。

確かに、東京では何もできないとおっしゃるお寺さんは多いんですが、でもあれだけの人口ですし、もし東京にカフェ・デ・モンクができれば、もうちょっとお寺さんに対する見方も変わってくるでしょうね。

【金田】 そう願いますね。私は

「カフェ・デ・モンク」というスタイルで被災地の苦悩に向き合っており。ですから場所に合わせて、また、その人の感性に沿ってそれぞれのスタイルを作れば良いと思います。よく「宗教をグルーブさせなさい」と今風に表現しています。仏教的に表現すると「遊化」ということでしょうか。グループというのは「躍動感」です。リズムに変化を付けてより生き生きとさせるという意味です。しかし、グルーブさせるためには基礎をきちんと学ばなければなりません。今流行の一過性の「イベント仏教」では駄目なんです。その時に臨床宗教師的な訓練をきちんと受けないと駄目です。自分勝手な躍動は独りよがりになってしまいます。東京都という風土に合わせて「グループ」して欲しいですね。すでに熊本には「カフェ・デ・モンク熊本」ができました。また、京都府では自死対策の一環で、「カフェ・デ・モンク」を参考に、龍谷大学の臨床宗教師と連携しながらカフェを運営し始めました。

最後に、曹洞宗の話にちよつと戻りたいんですが、曹洞宗の制度的なもの、積み重ねながらやってきているけれども、今の時代に合わなくなっている。【金田】先にもいいましたが、四年間教化主事をしておりまして、曹洞宗という巨大集団は制度疲労を起こしていると感じているのは、恐らく宗門行政に携わった方ならどなたでも感じているのではないのでしょうか。しかもそれに気づいていながら自己変革出来ない自縄自縛状態に陥っていると思います。これは東日本大震災などの危機的状況の時になおさらはつきりしてきたと思います。この四年間、私たちの活動に対し宗門からの援助は全くありません。しかしながら、このタイミングでこの様な援助があったら、宗門がこの様に動いたら、と思ったことは何度もあります。曹洞宗はチャンスを見逃しているのです。

総持寺二祖峨山様の業績は「人材・情報・行動」だと思っています。このキーワードで曹洞宗を全国に展開しました。更に加えるならば政財界等の世俗との上手な関わり方を熟知していたように思います。私たちはその心を「相承」しなくてはならないと思います。

曹洞宗では教化部直轄で本庁の出先機関である管区教化センターを全国に配置しております。管区センターの機能はいろいろな意味で宗務所とバッティングしている部分が多いと感じます。管区教化センターは曹洞宗の布教・教化ではなく、宗教の公益性を重視した活動、地方の政治・文化・医療・福祉・学会・マスコミ等を視野に入れ、その部分から吸収し、時には影響力を与えるという役割にシフトする必要があります。東北大学の講座の運営や臨床宗教師研修にも積極的に関わって欲しいですね。

震災で多くの財産と貴い人命が奪われました。人々の心はいまだに癒えておりません。仮設住宅にお住まいの方々は曹洞宗のお檀家様が多い。五年目に入りあらゆる支援団体が被災地から引き上げておられます。今こそ、私たちの底力を発揮する時だと思えます。

金田諦應・昭和31年4月12日生まれ。通大寺住職。駒澤大学大学院修了。東北大学大学院実践宗教学寄附講座運営委員長。日本スピリチュアルケア学会会員。カフェ・デ・モンク主宰

# 花まつり 寺子屋教室

春風にのせてパートII

秋田県 円通寺住職 菅原芳徳

本年四月二十五日(土)午前十一時より、昨年に引き続き西館好子先生・山口栄先生をお招きして、「春風にのせてパートII」のテーマの元、花まつり寺子屋教室を行いました。

午前十時から、諸山の老師に随喜して頂いての涅槃会・花まつり法要を厳粛に務めた後からであり、場内の空気が改めて清浄なるもの落ち着いた雰囲気の中で、最初の西館先生の講演の元、最初の西館先生の講演の元に染み入っていくようでありました。

母から子へ伝承されてきた子守唄は、合掌土偶の遺跡が発掘された「縄文の時代から祈り、唄ってきたものであり、命が命をみつめ、慈しみそしてつながっていくもの、これが人を人として成り立たせ、信ずる心を育ててくれる、貴重で尊いものである」

いつの時代であっても、信念



西館好子先生



歌詞を見ながら思い出しつつ...



ユーモアあふれる山口先生の歌唱指導



現代の唱歌を披露する子どもたち

の人は、発することばに言葉が宿るのだと感銘し、効率を求めがゆえ、目に見える成果のみを追い求めていく過程で、大事な心を失い、種々の弊害が噴出している現代にこそ、本当に必要な財産であると痛感いたしました。

と同時にこれは、まさしくお寺の存在意義に関わるものであると痛切に受け止めます。

もちろん社会とフェードアウトしていくお寺というのは逆に考えられなく、より密接に交わっていく過程で濃度を深めて、その内実となるネットワークを増やしていく方向であるとは思いますが、今はその中身が問われているのだと思います。

子守唄は、決して明るく朗らかな元気のいい唄だけではあり

ません。むしろ言葉の意味そのものよりも、どこか物哀しい旋律で、人の心のひだにふれる音の響きがあります。海・川のせせらぎの音、山谷のうごめく

後半は、山口栄先生の軽妙なトークに引き込まれながら、呼吸するが如く、子守唄のみならず、童謡、唱歌も含め、懐かしさと共に声を出す、そして届けたい喜びを会場の方々は感じていた様でした。

あまりに切なく絶句してしまふような出来事が年を追うごとにそして今年には特に感じます。それでも新聞・ニュース等で報じられる事件等はごく一部であり、表象として浮かび上がったくない事象も多いかと思えます。笑顔が伝承するように、人の気持ちは間違いなく他者に伝わります。受け止めてくれた上で、+αの祈りが返ってくると思っています。他者を思いやる「想像力」を一層喚起しつつ、「回向」に満ちた世の中となるよう、一燈を献ずる一人でありたいと願う気持ちが一層深くなった春の光景でありました。

## 読書案内

### 戦争が遺した歌



長田暁二著  
全音楽譜出版社 9500円+税  
781頁、横14cm×高さ19.4cm

## 『戦争が遺した歌』

歌が明かす戦争の背景

- 内容
- ① 維新より日清戦争
- ② 式典歌
- ③ 日露戦争前後
- ④ 兵科の歌
- ⑤ 第一次世界大戦より
- ⑥ 兵隊ソング
- ⑦ 軍国歌謡
- ⑧ 日支事変
- ⑨ 国民歌謡
- ⑩ 少国民愛唱歌
- ⑪ 太平洋戦争
- ⑫ 戦後の歌
- ⑬ 日支事変直前まで

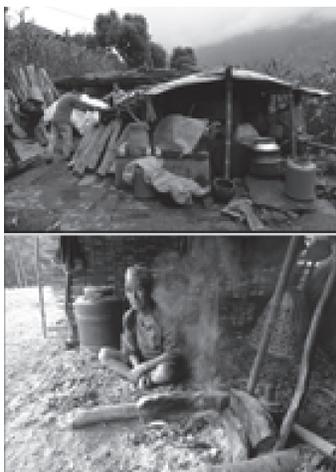
推薦文・西館好子

時代や環境がどうあれ、どの人も人生のドラマを生きている。どの人も生涯を貫く主題歌を持っている。明治大正昭和、激動の中に星屑のように輝く歌がこんなに沢山あるとは。(しかも楽譜付き) その歌の歴史や背景が細かく紹介されていて、めくっているうち、多くの人たちの声が聞こえ、励まされている感じがしてきた。博識記憶力人生経験豊かな人間の御所長田暁二氏の遺言をしっかりと受け止める真摯な思いに駆られる。偉業の一編だ。

ご支援振替口座名  
(郵便局扱いです)

NIJJI (虹) 宇野全匡  
02260-1-86167

○お問い合わせ先  
E-mail  
jifukuji@sage.ocn.ne.jp  
TEL 0237-35-2879



# ネパール・ズビン村大震災復興支援活動に あなたの温かいご支援を待っています

「貧しい、けど、幸せです」

20年前、初めて来日した村の青年のひと言でした。

そんな幸せを、大震災は奪いました。

今、お釈迦様生誕の国が苦しんでいます。

来日経験者28名が住む村の人々に、再び幸せを味わって頂きたい。

そんな願いを込めて支援活動を始めました。

## 仏教企画発行 の刊行物

★ ご支援口座名 ★  
(郵便局扱いです)

社会福祉法人輝雲会  
(手まり学園用)  
00280-0-  
115818

仏教企画  
(仏教企画通信用)  
00160-5-  
10996

### 「うたい継ごうよ、子守唄」

長田暁二・西館好子 対談集 1200円(※)

### 「まんが問答 一期一話」

文/平和宏昭・まんが/垣内敬造 1200円(※)

### 「道元禅より見たる般若心経解説」 CD付き

長井龍道 著 2200円

### 「葬送のしおり」 長井龍道 著 30円

### 「わが心の釈尊伝」 須田道輝 著 1800円

修証義読本「生老病死」 須田道輝 著 500円(※)

「曹洞宗檀信徒経典」 須田道輝 解説 300円(※)

### 曹洞宗檀信徒必読「供養のすべて」

霊元丈法 著 140円(※)

### 曹洞宗檀信徒必読「葬儀のすべて」

霊元丈法 著 150円(※)

(※部数により割引があります) ◎すべて税別価格です

## 曹洞禅グラフ

[発行日]

- ◆春彼岸号 2月20日
- ◆夏お盆号 5月30日
- ◆秋彼岸号 8月30日
- ◆冬正月号 10月30日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

### お申し込みは

仏教企画 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原 2-9-5-5  
TEL 042-703-8641 FAX 042-783-0989 fujiki@water.ocn.ne.jp

### 編集後記

東北大学実践宗教学  
寄付講座「臨床宗教師」  
養成講座の運営委員長・  
金田諦応師を取材して  
わたくしがずっと思っ  
ていることがある。

私事ではあるが、昭和38年に駒澤大  
学仏教学部に入学し、学内にあった竹  
友寮に入った。

福井県の高校を出て初めて上京し、  
何とか竹友寮にたどり着き、何もわか  
らないまま新館の6班の一室に案内さ  
れた。部屋は当時2年の長崎県出身の  
浦さん、新潟県出身の酒井さん、1年  
の米山、甘蔗、藤木の5人であった。

翌朝は非常ベルで起こされ、寮生活  
の第一歩が始まった。当時の竹友寮を  
ご存知の方はこれからのような寮生  
活が始まったかはおわかりいただけ  
ると思うが、当時のことが昨日のよう  
に思い出され懐かしい。

クラブには当時の3年生、田尻さん  
(島根県出身)、山本さん(横浜市出身)  
の二人に誘われて児童教育部に入っ  
た。日曜学校は中野区にある保善寺日  
曜学園であった。

保善寺日校では園児確保のために路  
傍伝道があり、紙芝居などをやった思  
い出がある。

夏には全国を10数カ所に分けて約1  
カ月の夏季伝道があり、昼は保育園、  
幼稚園、公立の小学校中学校に行き、

夜には婦人会に盆踊りを青年会には  
フォークダンスを教えた。  
夏季伝道に出るために人形劇、おど  
ぎ狂言、フォークダンスなど一流の講  
師が来て教えていただいたことも今思  
えば一クラブ活動でよくできたと思心  
する。

百年近い歴史があった児童教育部が  
今はなくなり、同窓会が年一回開催さ  
れ当時を懐かしんでいるが、先輩とし  
てはなんとも寂しい限りである。

思えば、児童教育部の活動は臨床宗  
教師講座(臨床仏教師講座)の一部を  
知らずして学んでいたのではないかと  
思う。

金田師が中心になって活動している  
東北大学の寄付講座・臨床宗教師講座、  
公益財団・全国青少年教化協議会が主  
催している臨床仏教師講座は今の仏教  
者には必要な講座だ。

住職の仕事の多くは臨床仏教であ  
る。宗教者の基礎教養として必要なの  
ではないか。

仏教教団が運営している学校法人  
でもその動きが加速しているようだ。  
動きが鈍いのが曹洞宗である。

近き将来必ず必要にかられるので  
駒澤大学や愛知学院大学では臨床仏  
教講座開設のために委員会を設けて  
もらいたい。龍谷大学、高野山大学、  
上智大学、種智院大学などではもう  
動いているという。

### 『仏教企画通信』ご支援寺院名

所在地	寺院名	金額
大阪府	南詢寺	10000
	合計	10.000

(H27/5/8 ~ 7/31) 敬称略

### 「手まり学園」寄附者ご芳名

所在地	寺院名(個人名)	金額
東京都	砂金智佐(69)	3,000
秋田県	円通寺	3,000
神奈川県	青木義次	4,000
埼玉県	吉祥院	20,000
大阪府	南詢寺	10,000
東京都	砂金智佐(70)	3,000
神奈川県	青木義次	4,000
佐賀県	高傳寺	10,000
東京都	砂金智佐(71)	3,000
	合計	60.000

(H27/5/8 ~ 7/31) 敬称略